

■研究・実践の課題（テーマ）

高齢者における蛋白質、とくに、血中アルギニン値に関する検討および、その後の経過～褥瘡を有する高齢者の血中アルギニン値の変化に関する推移～

■主任研究者 山中克己

■共同研究者 大西山大、松下英二

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

2015 年度は上記に示す研究テーマを実行し、課題に取り組む予定であった。しかし、2013 年度、2014 年度に協力が得られた 18 例のうち、平成 27 年(2015 年)4 月 1 日現在、8 例は既に死亡、2 例は他施設へ移動した。残りの 8 例を対象としたが、結果、この一年間で褥瘡形成した症例はいなかった(平成 27 年 12 月 31 日現在)。

従って、2015 年度は、2013 年度、2014 年度に取り組んできた「高齢者(褥瘡を有さない)における蛋白質、とくにアルギニン値の低下に関する検討」の症例数を増やすことに費やした。

(研究の目的)2014 年度までに実施してきた臨床研究で、当施設に入所していた高齢者(18 例)では、血中アルギニン値が概ね正常値であった(18 例中 16 例：88.9%)。本年度は新たに協力が得られた症例(4 例)を加えて、血中アルギニン値の変化に関して検討する。

(方法)本研究の実施にあたり、説明文書に基づき十分に説明を行なった(面接法)。なお、本研究は平成 26 年 1 月 31 日、本学の研究倫理審査委員会に申請し、承認された研究課題である(承認番号：92)ことを、文書内に明記した。

(対象)同意を得られた当施設に入所している 65 歳以上の褥瘡を有しない高齢者(84～97 歳)で血液検査を実施した(女性：4 名)。

(結果)総蛋白が正常(6.5-8.3)より低値であった症例は 1 例であった。アルブミンが正常(3.8-5.3)より低値であった症例は 2 例であった。ともに、低値であった症例は 1 例であった。BMI が正常(18.5-25.0)より低値であった症例はいなかった。アルギニン値が正常(53.6-133.6)より低値であった症例は 1 例のみであった。アルギニンに関して、統計学的検討を行った。しかし、アルギニンと相関性がみられた項目はなかった。

(考察)適切な喫食に伴い、2014 年度末まで当施設に入所していた高齢者では、血中アルギニン値は概ね正常であった(88.9%)。2015 年度に実施した結果でも、4 例中 3 例(75.0%)が正常であった。現在、一般の高齢者では、蛋白質、とくにアルギニンの摂取量が低下しており、経口よりの摂取量が足りていないと言うのが常識となっている。このため、サプリメントや栄養補助食品よりの摂取が推奨されている(一日の必要量：成人では約 6-7 g/day/BW：50-60kg)。

本研究は、インターネットを利用した論文検索や栄養会社への聞き取り調査を行なった。しかし、高齢者とアルギニン値の低下を示す因果関係を、明確に検証したエビデンスとなる論文が少ないのが実情である。

本研究では、当施設に入所していた高齢者で血液検査を実施した。得られた成果は、臨床的価値は勿論であるが、高齢者の福祉・健康にも繋がると考えられた。

(2016年度の研究・実践への提案概要)共同研究者(大西山大)が、平成28年4月1日より、他の老人保健施設(介護老人保健施設あんず)へ移動する。それ故に、過去3年間に実施した血液検査の結果(全22例)と他施設で今後、行われる検査結果を比較検討する予定である。

高齢化が進むわが国で、褥瘡治療は近々の課題である。加えて、アルギニンは、日本褥瘡学会が発表した褥瘡予防・管理ガイドライン(第3版:2012年)に「アルギニンが欠乏しないように補給してもよい:推奨度C1」と記載がある。アルギニン自体が、創傷治癒を促進する働きがあると言われている。2016年度に向けて本研究は、臨床研究を進めていくにあたり、礎となる研究課題であったと考えられた。